

吉田城先生の〈存在〉

森 本 淳 生 Atsuo MORIMOTO

吉田城先生の訃報に接したのは、たしか6月25日、パリに到着してすぐのことだったと思う。妻に電話で無事に着いたことを知らせたさいに、禹朋子さんから連絡があったことを教えられたのだった。しかし、スリジー＝ラ＝サルのシンポジウムでの発表はともかく、その直後に私自身のテーズのストナンスを控えていたため、帰国することもならず、ご葬儀に参列することもままならなかった。ただインターネットを通して弔電を打ち、先生ご自身の研究の場でもあったフランスの地から遠くご冥福をお祈りできたにすぎない。

私事をもう少し書き連ねることを許していただくなら、ほとんど挫折しかけていたテーズをなんとか完成させ7月初旬のストナンスにこぎつけたとともに、9月の一橋大学への転出をひかえていた私は、客観的には順調ともいえようが主観的には状況の激変に由来するきわめて不安定な状態にあり、そうしたなかで届いた先生の早すぎる突然の訃報は、これも渡仏早々に知ったヴァレリーの孫娘マルチヌ・ボワヴァン＝シャンポーさんのご主人逝去の知らせや、私自身が通りで走ってくるバスに危うくぶつかりそうになったこととも重なって、なにか言葉にできぬものとの密やかだが確実な遭遇に私に感じさせた。

どんな人の生にもいくつかの転換の時があるはずだが、私自身のそうした転機において、誰もが望まぬ死という悲しいかたちではあったが、先生の存在を強く意識することになったことを考えるとき、先生から受けた学恩とその影響の大きさを思わざるをえない。

それを一言でいえば、先生の〈存在〉ということになると思う。浅学非才な私は、とても先生の学識の広さについていけなかったし、先生の読書量の多さは遅読な私にとってつねに驚異であった。また、先生にはつねに鷹揚な寛大さをもって見守っていただいたとはいえ、おもに小説に関心の中心をおかれていた先生のご業績と、ヴァレリーの『カイエ』をいじっていた私の仕事とは必ずしも重なるものではなかったし、多少ヴァレリーの草稿を眺めたとはいえ、ジュネティッシアンを名乗るいかなる資格も私にはない。つまり、私は先生にとって不肖の弟子にすぎないのである。

だが、その不肖の弟子がたえず意識しつづけた先生の教えがある。それを私なりにまとめるならば、「誰にむけて書くかについて自覚的であれ」ということになると思う。いち早くフランスでテーズを書かれ、日本人としてプレイヤ

一版の編者になられた先生の存在は、すでに学部時代から私にとって、もしアカデミズムのなかで仕事をするのであればフランスの研究者と議論できるものでなければならぬというメッセージを伴って現れた。もちろん、フランスの研究者のレベルがつねに高いわけではないし、フランス語で書きさえすればいいというわけでもない——日本語で書かれた優れた研究も多数存在する——が、いわゆる「研究」の枠内でなされ、またなすべき仕事は、まず専門家に向けて書かれざるをえず、そうである以上、それは仏文の場合、必然的にフランス語になる。これは教えとしては厳しいものであり、日本語で国内向けの紀要論文を書きながら、専門研究をしていると自負するような曖昧な態度を一切許さないものだ。少なくとも私と同世代の学生たちは、そうした教えを内面化し、苦しむと同時に鍛えられたと思う。

言うまでもなく、いま述べたことは「アカデミズム」のなかで仕事をするならば、という前提での話である。先生自身、より広い視野からフランス文学を論じた日本語の書物を著されている。私も、小林秀雄論を書いたときに、自分の言葉の宛先が、ヴァレリーに関する専門論文を書いているときとは違うことに、いささかとまどいを覚えた。言葉は誰かに向けて発せられるものだ、ということは言ってしまうあたりまえなのだが、しかし、まさしくそうした他者との関係のありように応じて、語り方はもちろんのこと、問題の立て方も変わり、結局は語っている自らのポジションまでが変質してくるとすれば、このことを明確に自覚しているか否か、さらにはそれを方法的に書く作業に応用できるか否かは、きわめて重要なことであろう。それは発話する自らのありように自覚的であれ、という教えでもあるのだ。

先生はこうしたことを私に対して明示的に言われたことはない。しかしそれは、フランスでも高く評価されている仕事をなされた先生が身をもって示されたことのように私には思われた。そして、行為による教えは、言葉によるものよりもずっと重い。吉田城先生の〈存在〉が私たちにとって意味しているのは、そのようなことである。

冒頭で述べた渡仏中に会ったウィリアム・マルクスは、レストランに向かう途上で先生の功績を滔々と私に語って聞かせてくれた。先生の訃報がさまざまなメディアに載ったことも、先生の存在の大きさをあらためて私たちに理解させた。また7月のスートナンスで、審査員の一人アラン・モンタンドン氏は、日本のフランス文学研究の水準の高さに言及し、「先日残念にも亡くなった」先生のお名前と、敬愛する先輩であるネルヴァル学者の水野尚さんを挙げられ、多分に外交辞令ではあるにせよ、恐れ多くも拙論を先生に始まる学統のなかに

位置づけて下さった。その正否はともかく、フランスで私のような者の研究がまがりなりにも受け入れてもらえるのも、先生が苦勞して道を切り開いてくれたからであり、ただただ頭の下がる思いである。

翻れば、先生に初めてお会いしたのは、京大に入学した1989年から90年にかけての冬、教養科目として開講されていたフランス文学のリレー講義においてであった。革のコートを着て「寒いね」と言って颯爽と教室に入っていた先生のお姿が今でも目に浮かぶ。翌年度には、教養で典子先生にフランス語を教えていただくとともに、学部で先生が開講されていたブルーストの講読に無謀にも参加させていただいた。もちろんフランス語を始めて2年目の学生にブルーストがまともに読めるはずもなく、一行ごとに辞書をひき、翻訳をながめながら、読むというより「解説」したに等しかったが、学生の翻訳を聞きながら、ささっとテキストに印をつけ、そのあとで問題点をひとつひとつ的確かつ丁寧に指摘されていく先生の姿を驚きの目をもって眺めていたことを覚えている。

それから15年以上が過ぎた。その間の自分の成長を思うと恥ずかしい。じつは、ヴァレリーに関するテーズを書いているときは、意識的にも無意識的にもひどい視野狭窄に陥っていて、すべてをテーズとどう関わるかという点から判断していた。テーズが終わって気持ちに余裕ができ、もっと広い、とはいわぬまでもいくつかの異なった視点から文学や思想について考えることができるのではないかと思えるようになった。ある意味で、やっと先生に教えを請うところにまで達することができたわけである。しかし、先生はもういらっしやらない。ただ、先生の研究への情熱と病気にもかかわらず絶やされなかった笑顔を思い、あらためてご冥福をお祈りするとともに、いつの日か先生の警咳に接した者の名に恥じぬ研究を実現することがせめてものご恩返しではないかと思えるばかりである。

(もりもと・あつお 一橋大学大学院言語社会研究科助教授)